

昭和卅九年三月十一日 第三種郵便物認可
平成元年三月十一日発行（毎月一紙）一日発行
俳句雑誌 沖 発行所第12号



俳句雑誌[おき]

12月号

沖 発行所

遊 び 着

能村 研三

モチーフのこだわり

月光のふりけぶらせり箒草
月明に我立つ他は箒草

俳句では、一つの言葉、一つの季語にこだわり何度も推敲を重ねることがある。

掲出の一句目は登四郎第一句集『咀嚙音』に収められている昭和二十七年の作品。そして二句目は登四郎最晩年の平成十二年の句で句集『羽化』に収められている。この二句の作品の間には五十年の歳月があるが、一人の作家が五十年の年月を経ても何かこだわりつづける何かがある。この二句は推敲を重ねた結果の句ではないものの、「月明」の句完成の五十年前に一つのモチーフが芽生えていたのかも知れない。

絵画の世界でも、一つのモチーフにこだわって模索と推敲を重ねながら一枚の絵が出来上がっていく過程がある。

市川の東山魁夷記念館で開催されている特別展「東山魁夷〈道〉への道」では、代表作の「道」の本画を展示すると共に、そこに至るまでのスケッチ、小下図、大下図、試作など十数余りの過程を一挙に見ること

立ち読みの背にある隙や秋の暮

一笛は鋼の音色 浦祭

芋の露ころげし瞬の宇宙かな

納屋廂吊るものはみな冬仕度

秋惜しむ日本橋島根物産館

遊び着の休日出勤冬うらら

三の酉あるを儲けと思ひけり

怠け顔鏡に見られ神無月

蓮根掘無声映画のごとくなる

衰残のオーケストラに冬日射せ

が出来る。

東山魁夷の「道」は私が生まれた翌年の昭和二十五年、第六回の日展に出品された作品で、その前に描かれた「残照」と共に出世作といわれている。

「道」の舞台となった場所は、青森県八戸の種差海岸で、戦前にここを訪れたときのスケッチを取り出して眺めているうちに、縦長の画面の中央に道だけを描く構図に思いついた。画伯は、ふたたび種差におもむいて、綿密な写生を重ねた。野をつらぬく一本の道。現実の風景では前方に立つている灯台も、ここでは省略されている。これは画家の心象が託された、象徴の世界。これまで作者自身が辿ってきた道であり、同時に、ここから歩いていこうとする道でもあった。

実景を描きながらも、入念な準備と、作者の深い思いが、省略をくり返し単純化した象徴の世界を創り出している。

能村 研三



秋思

林翔

句碑ふたつ

富安風生と水原秋櫻子とは、旧制一高で同期生だったと聞くが、風生の方が年長、病気で休学されたことなどもあるのかも知れない。

東大では秋櫻子は厳父水原漸^{すな}博士の後を継ぐべく医学部に入り、風生は法学部に入ったが、東大俳句会で共に競い合う仲であった。そして、秋櫻子は医学博士として水原産婆学校の校長兼病院長となり、風生は通信省に入って通信次官にまで昇進した。

思ひ亦幾筋秋の雲三筋
踏む細枝また踏む細枝野分あと

通過駅なりしよ芒なびくのみ

霧茫茫中の緋色は楓かも

市川市の真間山弘法寺境内に、梨咲くと葛飾の野はとのぐもり
の秋櫻子句碑が建立されたのは昭和二十七年である。「梨咲くと」は、「梨咲かむとして」の意。この句が詠まれたのは昭和二年である。石橋ひかる著『秋櫻子句碑めぐり』によると建立主唱者は篠田悌二郎、石田波郷、田中次郎、能村登四郎、林翔（以下略）となっている。

老いらくの恋にかも似む薄紅葉

夕空に一顆の柿が忘れもの

老の艶まだまだ褪せず木守柿

翁 咳 嘔 や 真 青 空

短足も歩を刻むもの霜の朝

十二月五日

モーツァルト忌かのレクイエム誰が為ぞ

同じく弘法寺境内の伏姫桜の樹下に風生句碑が建てられたのは、昭和四十五年であった。

まさなる空よりしだれざくらかなこの句が詠まれたのは昭和十二年で風生がここを訪れた時の作という。

「林君、一緒に乗らないか。」という秋櫻子の声に振向くと、タクシীর車内に秋櫻子と風生が坐っていて私が恐縮しながら途中まで同行させて頂いたのは、この除幕式の後であつたように記憶する。

市川市文学プラザで「水原秋櫻子と富安風生が詠んだ葛飾」の展示会が開かれている。来年一月二十八日までとのこと。

林 翔



蒼茫集



風の距離

安居正浩

北斎の波にかげりの秋はじめ
水澄むや大津京都是風の距離
稲雀となれぬ一羽が縁側に
庭下駄の片方遠し野分晴
目力の海老蔵に酔ふ秋裕
富有柿刃覚悟の坐りやう

だんだん

辻直美

噴煙を素秋の白とおもふかな
冬瓜を抱いて愛しきもの遠し
葛の花隠れ住むにはあらねども
太幹のさびしくなりぬ法師蟬
鍵かけてをり月光の入らぬやう
死はふいに月はだんだん天心へ

小昼

千田百里

ことしから兄さんも来る門火焚く
パート待つフルート秋意の唇を当て
車掌身を乗り出し霧の通過駅
霧を来しリフトが霧へ折り返す
身をしのぐ尾を立て栗鼠の小昼かな
雲の後わたしがいそぐ秋の暮

祝婚

大畑善昭

祝婚や紫苑の丈に虻遊び
よく肥えて宴もあらむ女郎蜘蛛
なきがらの電池秋日に当てておく
火はいつか懊のしづけさ秋の暮
色なき風よ脱退のひと如何に

裏におもてに 北川英子

悠揚と裏におもてに桐一葉
天網の疎より広がり鱗雲
稿了す酔芙蓉まだ白きかな
くゆるなく一気火となる曼珠沙華
さめざめと濡れて生り年茸山
六根清浄霧に白衣の消えゆくも

眠らむと 荒井千佐代

鶏頭の乾いてきたる灘の風
黄落す寢墓しづかに眠らせて
旧約・新約・英訳聖書いわし雲
菜莢の実や書かねば五感衰へる
眠らむと力を抜きぬ虫すだく
ラストオーダー全員が茸飯

鳥渡る 吉田政江

鳥渡るカルテの厚み増しにけり
曼珠沙華葉効といふ毒信じ

糶穂のはや隣田と競ひけり
からす瓜見つけて欲しきかくれんぼ
七五三石段の数声出して
三つ覚え一つ忘るる草の花

野島崎 遠藤真砂明

川霧に日輪淡き弧をなせり
会津嶺に天の傾く秋入日
登高の天心に日のとどまれり
温泉けむりに秋の漁火ゆらぎ点く
身に入むや海女の影なき野島崎
手送りに積む出港の今年米

師の師 望月晴美

秋櫻子版
さはやかや師の師と師の字似通うて
散るもののなからふはり秋の蝶
振り向いてみたくて入る夕花野
もみぢ連山落日に火を移す
かつて師を見かけし花屋菊あふる
踏み入りて藁塚の香の合掌家

潮鳴集



青き針

栗原公子

小鳥くる携帯電話に小さき窓
虫すだく夜光時計の青き針
ドアノブのかちりと釣瓶落しかな
コスモスの原つば何処かに落し穴
十月の風に日の翳日の匂ひ

北斎の波

宮内とし子

初嵐北斎の波咆哮す
糸すすき島に一つのホテルの灯
出格子に濃き日集める唐辛子
蓮の実の飛ぶや発心前のめり
格式を守りて古りたる紅葉宿

杉玉

渡部節郎

甚平着てそば打ち道場修了証
杉玉の青匂ふなり豊の秋
もろこしの振分け干しや藁庇
七草に露置く草と弾く草
刈り終へて夫の蘆舟待つ中洲

がまんの色

甲州千草

案内の文も走りて運動会
鶏頭をがまんの色と思ひけり
百舌しきり空の張力衰へて
蕎麦湯吹く花野帰りの膝を折り
月光に影の縮まる広葉樹

沖作品



能村研三選

モネの水さながら南湖秋日燦

市川市

宮島 宏子

露けしや隊士の墓は城に向き
鬼の子の人の世覗く木の間かな
子どもらの来てすぐ帰る衣被
電子音に言の葉洗ふ秋燈下

千葉

佐久間由子

湖の風を聴きをり秋澄めり
鈴付けし歩荷を急雨打ちにけり
咲くまではさみどり一途曼珠沙華
みづうみに風の一ひら秋の蝶
しるがねの風を手折りぬ芒原
字小字祠を紡ぐ秋櫻

市川市

岡本 崇

月山の麓くすぐる芋水車
零余子引く大方土に還しつづつ
虫時雨ききつづ綴る農日誌
日の力残せしままや捨案山子

続編に続編のありぬのこづち
鉛筆の芯の匂へる無月かな

千葉

篠藤千佳子

言の葉を呑み込むほどに星降る夜
石畳そこだけ濡れてゐる良夜
東京の都合ひ頭の残暑かな
マンドリン屈背に秋をかき鳴らす
長き夜の音消して弾くピアノかな
竹叢の葉擦れさやかに雨あがる
唐辛子やせて軒端に逆さ吊り
鯊跳ぶやすつてん晴の三番瀬

佐々木よし予

五重塔良夜の影をまはすなり
靴紐をゆるめて洗ふ水の秋
爽やかや左右の耳にちがふ音
木道のかすかな凹み秋澄めり
烏瓜磴のぼる人下りるひと

市川市

代田 幸子

沖作品 15句選評

*

能村研三

モネの水さながら南湖秋日燦 宮島 宏子

白河の勉強会での作品。南湖は楽翁公とも言われた白河藩主松平定信によって造園された、我が国最古の「公園」である。「南湖」の名は、李白の詩句「南湖秋水夜無煙」から。また、白河城（小峰城）の南に位置していたことから名づけられたといわれている。中々趣のある公園で、私たちが訪ねた時は、池の面には睡蓮がきれいに咲いていた。睡蓮と言えば、モネの絵を思い出す。

モネは、屋敷に隣接して日本風の庭園を造成し、そこに睡蓮を浮かべた池をしつらえた。モネは何枚何枚も睡蓮の絵を描いているが、朝から夕方まで、時とともに変化する池の様子、水面に映る花の美しさを捉えようと試み、水面の神秘的なまでの美を描き出した。秋の日に輝く南湖の川面はどんよりとしてモネが描いた水面を思わせた。

しろがねの風を手折りぬ芒原 佐久間由子

飯田蛇笏の「をりとりてはらりとおもきすすきかな」の句のイメージが下地にあるような句で、風になびく芒を折り取る瞬

間を細かく描写している。同じ蛇笏の句で「くろがねの秋の風鈴鳴りにけり」の句の「くろがね」と「しろがね」の違いこそあるが、この蛇笏の名句を意識した句の構成であるのがおもしろい。まだ開ききらぬ銀色の穂が、しろがねの風に揺らいでいてまだしとりと濡れたような質感まで鮮明に伝わってくる。

零余子引く大方土に還しつづ 岡本 崇

岡本さんは、家庭菜園で野菜などを作られているようだが、この句もその経験から生まれた句であろう。零余子は自然薯、長薯などの葉脇にできる珠芽で大きさは一センチくらいのものである。採ろうするとポロポロと土にこぼれてしまう。零余子の特徴がよく詠まれている句である。

続編に続編のありぬのこづち 篠藤千佳子

テレビドラマなどで、視聴者から好評をかくして物語は完結した。続編を是非作ってもらいたいという要望に、テレビ局は同じスタッフとキャストで続編を作ることになった。ところがこれが又又あつてさらなる続編の要望の声があがった。終わりの見えない、本当に面白い内容のドラマなのだろう。「あのこづち」も人の服などについて、全く違う場所にも運ばれるもので、続編の続編にイメージがつながる。

鶯跳ぶやすつてん晴の三番瀬 佐々木よし子

すつてん晴れとは、浦安の方言で「雲一つない晴天」という意味。方言をうまく一句の中に取り込んだのがおもしろい。東京に近いのに独特の方言が残っているのは、浦安が漁師町であったことや、陸の孤島であったからだという。三番瀬は、昔から江戸においしい魚を送れる漁場でもあったが、埋め立てられることなく今の環境が残されることになった。